

推 薦 状

写真語り万華鏡ルポライター 税光詩子

堀江節子さんは2023年7月に『黒三ダムと朝鮮人労働者-高熱隧道の向こうへ-』を上梓した。

タイトル通り、この本は黒部川第三発電所建設に関わった朝鮮人労働者の実態と遺族を追ったドキュメンタリーである。黒三ダムは1936年に着工し4年の歳月をかけて完成するが、日中戦争が本格化する中、男手が不足する現場で、泥にまみれて最底辺で働き、危険な現場で命を落とした数多くの朝鮮人労働者がいた。今まで誰も気に留めようとしなかった朝鮮人労働者の存在に目を向けた一冊だ。

朝鮮人労働者への関心は幼いころに始まる。1948年生まれの堀江さんは幼いころにお父さん（黒四ダム建設車両のタイヤ修理をしていた）が語った、黒四ダム工事と共に黒三ダムで多くの人が亡くなり、その中に朝鮮人もいたという話が、ずっと心に残っていたという。大学時代に「在日」問題を知り、自分では選べない属性によって劣位に置かれる人々への現状へ疑問を抱く。結婚出産を経て、余裕のできた時間をおかねてから考えていた在日コリアンの聞き取りに取り組みようとした。県立図書館で1900年代からの地方紙で在日に関する情報を繰り漁り、金泰燁『抗日朝鮮人の証言』（不二出版1984）に出会う。

その頃、1986年地元紙のコラムに黒部川第三発電所建設当時の志合谷雪崩事故の遺族・金鐘旭さんの手紙を見出し、朝鮮人労働者の実態を知りたいと、金さんと交流のあった雪崩の研究者・清水弘さんの仲介により文通を始める。2年後金さんの死により4通28葉の文通は終わるが、当時の暮らしが細かに記されている。4年後、韓国に金さんの遺族を訪ね、多くの遺族の聞き取りをしている。

同様に1986年7月の地元新聞読者コーナーの投稿から黒三ダム労働者の子孫、孫秀栄さんを見つけ手紙を書く。文通が始まり徐々に関係を深め、1992年には韓国取材が実現する。孫さんとの交流は心温まるものだ。これらは1992年に上梓された、『黒部・底方の声-黒三ダムと朝鮮人』（堀江節子 内田すえの 此川純子 共著 桂書房）第二章「朝鮮人遺族たちの半世紀」に収められている。外国人労働者の情報がほとんどない中で、小さな新聞記事を見逃さず、根気よく追いかけて、多くの韓国人関係者の声を引き出したことは大きな功績と言える。暗い歴史についてこれだけの声が聞けたのは、彼女の人柄はもとより、第二次大戦の加害者国の一員ということを意識した対応があったからだろう。

堀江さんの研究スタイルの基本は「聞き書き」にある。人に会って話を聞くのが大好きなのだ。だれも振り向こうとしなかった弱者たちの声を生で聞き、書き留めることを第一義としている。

すでに 1992 年に上梓したのに、この問題について堀江さんが再びペンを執ったのはなぜか。ひとつは、2018 年に韓国人、朴垠貞さんから『黒部・底方の声ー黒三ダムと朝鮮人』の韓国語訳を出版したいという申し出があり、それに励まされて堀江さん自身も自分の視点で、またその後の出来事も書き加えようと思ったことがある。もっとも問うているのは、「朝鮮人労働者の存在を黙殺」し続ける地域の現状である。宇奈月町史の中で朝鮮人労働者の存在は記載されていない。「あったことを記録しない不記載もまた歴史的事実を否定する歴史修正主義といわざるを得ない」と指摘する。「歴史の事実を双方で認め合い、共通の歴史認識を育てることで、平和な未来につなげたい」思いがこの本に込められている。

2 冊の本を取り上げてきたが、他に『総曲輪物語』『人間であって人間でなかったーハンセン病と玉城しげー』『日本人になった婦人宣教師 亜武巢マーガレット』等があり、共著には『メディアに描かれる女性像』『きっと変えられる性差別語』『作文が生まれるときー和田侃の軌跡ー』がある。また、編集者として『川の吐息、海のため息ールポ 黒部川ダム排砂』(角幡唯介)『脳性マヒの私が 65 歳の現在書いておくこと』(河上千鶴子)、富山写真語『万華鏡』(風間耕司主宰)など多数の書籍編集に関わった。

市民活動としては、長期にわたり在日フィリピン人女性の支援、ビルマ少数民族の少女への教育支援、困窮者への炊き出しなどを行う他、戦後補償問題や差別、ジェンダー、メディアに関わる問題に積極的に関わってきたアクティビストであることも記しておきたい。

以上の長年の活動と出版の功績により堀江節子さんを推薦します。